

エミール・ゾラ『マドレーヌ・フェラ』に おける感応遺伝について

森田 陽子

はじめに

エミール・ゾラは、科学という文学とは一見かけ離れた分野に、同時代の作家たちと比べてみてもとりわけ強い、熱狂的とも言える興味を示し、作品にもしばしば取り入れた。ゾラ作品と科学理論の関わりといえば、まず我々が思い浮かべるのは『実験小説論』だろう。ゾラはこの論文においてクロード・ベルナールの『実験医学研究序説』を引用してみせ、それが批評家やゾラの友人¹までを含めた批判の嵐を呼ぶことになった。『実験小説論』以外のゾラの作品においても医学は重要な位置を占めている。全二十巻に及ぶルゴン＝マッカール叢書の最終巻である『パスカル博士』(1893)の主人公パスカル・ルゴンは医者であり、しかも単に患者を診療するだけではなく、ルゴン＝マッカール家の人々という自分の親族たちを実例として分析することで遺伝法則に関する研究を進め、遺伝の神秘を解き明かすことであらゆる疾病を治し、世界に幸福をもたらすべく日夜研究に励み、人類の進化に貢献したい²という強い信念を持った医学者でもある。パスカルの研究は叢書の最後を締めくくるこの作品の主要なテーマの一つとなって、時にはストーリーを導く役割まで果たしている。遺伝学という19世紀においてははまだ萌芽の状態にあった研究分野に魅せられ、情熱を傾けていたのは、パスカル・ルゴンだけではない。ゾラがルゴン＝マッカール叢書を執筆するにあたって作成した準備資料には、複数の医学書のレジュメが含まれているが、中でもとりわけゾラがページ数を割いているのが、プロスペル・リュカ博士の『自然遺伝に関す

¹ ゾラ夫妻と親交があり、ゾラ、ユイスマンスらとともに『メダンのタバ』(1880)に執筆もしているアンリ・セアールはゾラの公私にわたる友人であったが、そんな彼も『実験小説論』には難を示したのだった。

² cf. *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1967, pp. 947-948. 以下、本稿では *RMV* と略す。

る哲学的小および生理学的概論』³に関する覚え書きである。ゾラはこの本に書かれている遺伝法則を、具体例も取り混ぜながらノートを取り、さらに最後にはそのノートの要約もつけている。ルゴン＝マッカール叢書の登場人物たちの人物設定やストーリー展開にこうして要約した内容を取り入れていることから見ても、ゾラがリュカ博士の学説にどれほど感銘を受けたかが察せられる。プレイヤッド版にして36ページにわたるこの覚え書きには、遺伝に関して次のような一節がある。

(発現する形質を) もたらすのは父か母 (直接遺伝)。傍系親 (間接)、父や母の先祖 (回帰)、以前の配偶者 (影響によるもの)⁴ ——

こうして遺伝形質を生成する上に挙げられた四者の中でもとりわけ目を引くのは、四番目の「以前の配偶者」という項目であろう。両親や近親者からの遺伝、あるいは何世代か前からの隔世遺伝というのならばまだ納得はできるが、はたして以前の配偶者からの「影響による」遺伝とは一体何を意味しているのだろうか。

感応遺伝

疑問を抱きつつゾラのノートを読み進めてみると、ほどなくしてその説明とおぼしき箇所が現れる。

影響による遺伝、以前の配偶者の表出 [...] 牡ろばによって受胎した牝馬は、らばを産む。その後、もしこの牝馬が牡馬によって受胎した場合、生まれてくる仔が少し牡ろばに似ていることがある。——豚——犬⁵。

つまり、この遺伝法則によれば一度あるオスによって妊娠し、その仔を産んだメスが、その後違うオスによってふたたび妊娠した場合、生まれてくる

³ 正式な題名は以下の通りである。Prosper Lucas, *Traité philosophique et physiologique de l'hérédité naturelle dans les états de santé et de maladie du système nerveux, avec l'application méthodique des lois de la procréation au traitement général des affections dont elle est le principe. Ouvrage où la question est considérée dans ses rapports avec les lois primordiales, les théories de la génération, les causes déterminantes de la sexualité, les modifications acquises de la nature originelle des êtres, et les diverses formes de névropathie et d'aliénation mentale*, J. B. Baillièrre, 1847-1850, 2 tomes.

⁴ *RMV*, p. 1704.

⁵ *RMV*, p. 1706.

仔は最初のオスの形質を受け継ぐというのである。医学に深い関心を持っていたゾラを魅了したであろう学説のなかでもひとときわ異彩を放ち、ファンタジーとイマジネールに富んでいるように思えるこの遺伝理論は、感応遺伝(imprégnation)と呼ばれるものである。この説は、アリストテレスの時代から何十世紀もの間人々に支持されてきた民間信仰であり、その信奉者は一般人、学者を問わず絶えることがなかった。感応遺伝説は二十世紀に入っても依然として打ち捨てられることはなく、真剣な議論の対象となり、第二次世界大戦の際にはファシスト政権のドグマとして利用されたこともあったという。

実は、ゾラはこの感応遺伝という説をリュカ博士の著作を読んで初めて知ったわけではない。ゾラが若い頃敬愛していたミシュレが著作『愛』(1858)の中で感応遺伝を何度も取り上げているので、ミシュレを通してすでに知っていたのである。ゾラに多大なる影響を及ぼしたミシュレの感応遺伝に関する見解は非常に興味深いが、両者の解釈の違いについては後に述べることとする。先に引用したように、ルゴン＝マッカール叢書の準備資料に感応遺伝についてのメモを残しているゾラであるが、叢書においてこの理論が言及されることはあまりない。数少ない例として挙げられるのは、『居酒屋』(1877)の主人公ジェルヴェーズの娘ナナと、ジェルヴェーズの最初の恋人であったランチエとの類似であろうか⁶。しかしこれは例外的なもので、他の遺伝法則に比べれば叢書全体を通して作品への取り入れられ方はかなり抑えられている。とはいえ、ミシュレと同じくこの理論に強い印象を受けたと思われるゾラは、ルゴン＝マッカールという枠の外にそれを結晶化させている。叢書の構想をめぐらせ、準備資料を作成していたと思われる時期(1867年から1869年にかけて)とほぼ重なる時期に書かれた作品『マドレーヌ・フェラ』がそれである。

⁶ ジェルヴェーズは恋人のランチエに捨てられた後、ブリキ職人であるクーポーと新たに所帯を持ちアンナ(通称ナナ)という娘をもうける。ナナはクーポーの娘であり、ランチエとは当然血の繋がりはない。しかし、ジェルヴェーズとクーポーの家庭に入り込んだランチエとナナは互いにとって一番の理解者となる。ランチエと同じように甘いもの好きで、異性に対して抜群の影響力を持つナナは、ジェルヴェーズやヴィルジニーの財産を食いつぶしてしまったランチエと同じように、後に『ナナ』(1880)で男たちを破滅させることになる。『パスカル博士』においてパスカルは、影響による遺伝の例としてランチエとナナの類似に言及している (cf. *RMF*, p. 1007)。

『マドレーヌ・フェラ』と感応遺伝

1868年に執筆され、同年にラクロワ社から出版された小説である『マドレーヌ・フェラ』は、時間軸から見ると、『テレーズ・ラカン』（1867）とルゴン＝マッカール叢書第一巻『ルゴン家の運命』（1871）の間に位置している。ゾラは、小説の出版にあたり、芸術家の作品への権利を踏みにじろうとする検閲行為に抗議しながら、この小説に関してトリビューン紙に次のように書いている。

わたしはこの説をミシュレとリュカ博士の作品から採用した。それを簡潔で断固たるやり方でドラマ化した。一つの医学研究を書いたことによって良俗を汚したかもしれないなどは認めたくない。わたしからしてみればその目的は人間的で高潔な道徳性から生じているのである。この研究は、生理学的観点からみて、婚姻関係を永遠のものと受けとることを目指している。[...] わたしはこの科学理論を作品化したただけだ。自分は有益で正直な本を書いたと信じている⁷。

ゾラ自身がミシュレとリュカ博士から採用したと認めている「この説」とはもちろん感応遺伝説のことである。ゾラは「この科学理論を作品化したただけだ」というが、実際のところ感応遺伝は作品の中でどのように取り上げられていくのだろうか。

1. 登場人物と物語の展開

エドゥアール・マネへの献辞が添えられたこの小説は、ギヨーム、マドレーヌ、ジャックという三人の若者が主要な登場人物を構成している。ゾラのその他の小説でもよく見られるように、第一章で二人の外見や性格、気質などが細かに描写される。簡素な身なりながら生命力に溢れるマドレーヌの特徴は、顔の上部に見られる「男のようなごつき」(dureté masculine⁸)とそれとは対照的な顔の下部の「肉感的なやわらかさ」(voluptueuses mollesses⁹)が象徴するように、男のように頑固で気丈な面と官能的で女らしい面を併せ持

⁷ « Causerie », *La Tribune*, 29 novembre 1868 in *Œuvres complètes*, publiées sous la direction de Henri Mitterand, Nouveau Monde éditions, t. 3, 2003, pp. 574-575. 以下、本稿では *ŒC* と略し、巻数を付す。

⁸ *Ibid.*, p. 186.

⁹ *Ibid.*

っている点である。ほっそりとして貴族的なギョームは、ときおりほとぼしる誇りと「女のような感受性」(sensibilité de femme¹⁰)が特徴になっている。対してジャックは、早くから女遊びを覚えたために女に対する軽蔑を持つてはいるが、陰険さはなく、「楽しく暮らすたくましい男特有の荒っぽい気の良さ (la bonté rude d'un homme vigoureux qui vit joyeusement¹¹)」がある。物語はギョームとマドレーヌの恋愛を主軸として展開する。ギョームとジャックはコレージュ時代の親友なのだが、実はマドレーヌがギョームと出会う直前までジャックと同棲していたことが発覚することから、物語はほとんどメロドラマと言っていいほどドラマティックなものになっていく。それでは複雑に絡まりあう三人の関係をマドレーヌとジャック、ジャックとギョーム、そしてギョームとマドレーヌとジャックという単位に区切って見てみたい。なぜなら、ギョームとマドレーヌの関係にはジャックという存在がほとんど常について回るからである。

2. マドレーヌとジャック

マドレーヌの出自とジャックとのなれそめは第二章で語られる。両親と死に別れ、後見人の家にもいられなくなったマドレーヌは、パリで出会った男に率直に自分の身の上話をする。そして彼の家までついていき、自分でも説明できない衝動に駆られ自分から彼に身を任せ関係を結ぶ。翌日、「近いうちに外国へ行くことになっている」と打ち明けてきた男の言葉に身を引き裂かれるような思いがした彼女は、パリにいる間だけでも自分を家に置いてくれるよう頼み、彼は承諾する。女と真剣に付き合ったことも付き合う気もないが、根は陽気な彼に連れられて遊ぶうちに、マドレーヌはグリゼットのような生活にも次第に抵抗を覚えなくなっていく。しかし軍医として任命されたばかりの彼は、召集を待つ身であったので、マドレーヌは常に彼が急に旅立つかもしれないという不安に怯えることになる。

だが、いつも彼を失うのではないかとおそれつつ、それでもやはり彼と関係するということは、彼女を彼にかたく結びつけることになった。彼女は決して彼を情熱的に愛したわけではなかったが、むしろ彼の痕跡が彼女に刻まれて自分が彼になるのを感じ、彼が自分の身も心も完全に所有しているのだということ

¹⁰ *Ibid.*, p. 187.

¹¹ *Ibid.*, p. 208.

が分かった。いまや、彼は彼女にとって忘れられない男になった¹²。

恐怖によってより一層強く恋人に結びつけられたマドレーヌには彼の痕跡が刻まれ、彼女を完全に所有するにいたった彼は、こうして彼女にとって忘れられない存在になったのであった。この後、彼はついに召集令状を受け取り戦地へと旅立つのだが、駅での別れも素気なく、マドレーヌは最後まで彼の名前すら知らされないまま一人残される。癒しがたい失恋の傷を抱えて暮らすマドレーヌの隣の部屋にギヨームが引っ越してくることが、彼女にとって新たな生活の始まりとなる。マドレーヌと彼女の最初の恋人である「彼」との関係は、感応遺伝説を作品に導入する前提となり、マドレーヌの心身から永遠に消えない彼の「痕跡」はこの後の物語に繰り返しあらわれ、作品の中核をなすことになるだろう。

3. ジャックとギヨーム

ヴェトユイユという町に住むド・ヴィアルグ伯爵と村の公証人の妻との間に不義の子として生まれたギヨームは、その出自や父親の高い身分へのやっかみなどから、コレージュの生徒たちのいじめの対象であった（第三章）。そんなギヨームに同情し、いじめっ子たちから救い出してくれた年上の友人がジャックである。パリから来たジャックはすでに女性経験が豊富だったのですぐにコレージュの生徒たちの尊敬を得た。人気者のジャックがかばったことでギヨームへのいじめは止む。他に友達もいないギヨームは、ジャックを無二の親友かつ先輩として敬愛するようになったのだった。

彼は自分の保護者に対して熱い友情を抱いた。人が初めての恋人を愛する時のように、絶対的な信奉と盲目的な献身をもって彼を愛した。彼の優しい性分はようやく出口を見つけ、ずっと抑制されていた愛情が丸ごと、手と心で彼を助けてくれたこの神へと向けられたのだった¹³。

女性のような繊細な感受性を持ったギヨームのジャックへの友情は、恋愛感情にも似た熱烈なものである。また女に対して冷めた考え方をするジャックとは違い、ギヨームが理想とする恋愛は、ジャックへの友情と同じようにひたすら恋人を敬い、崇めたてるといふ極端な形をとる。このように正反対の女性観を持つ二人であるが、コレージュにいる間は無二の親友同士として

¹² *Ibid.*, p. 209.

¹³ *Ibid.*, p. 221.

過ごす。コレッジを卒業後も、ジャックがパリに移り住んでからしばらくは交流があったのだが、そのうちジャックの音沙汰がなくなり、ギョームがパリに出てきたときにはジャックはすでに出征してしまっていたのだった。

4. ギョームとマドレーヌとジャック

パリで傷心を抱えたマドレーヌの隣の部屋にギョームが引っ越して来て、若い二人は自然に仲良くなり、ほどなくして互いの部屋を行き来するようになる。二人はブローニュ街で一緒に住み始め、ある日、マドレーヌは、アルバムの写真を目にして、ギョームとジャックが親友同士だと知る。しかしギョームには真実を知らせず、わけありげな彼女の態度に彼は不安を覚える。

第五章では、自ら命を絶った父から名前と爵位を譲り受けたギョームが、父の領地であるヴェトゥイユに戻り、マドレーヌを呼び寄せる。田舎生活によってマドレーヌは生き返り、二人の仲もふたたび順調に運び始める。しかし、ある日ギョームが切り出したプロポーズの言葉をマドレーヌは自分でも驚くほどきっぱりとした口調で断ってしまう。

実のところ、ギョームのプロポーズに彼女は奇妙な抵抗を覚えたのだった。彼がなにか不可能なことを求めているような気がして、まるで自分が自分のものでなく、他の男にすでに所有されているかのようなのだった。彼女は、愛人に夫婦として暮らしてくれと言われた時の人妻の声と身振りをしていたのだった¹⁴。

しかし、ギョームと結婚することでジャックのことを忘れようと思いついたマドレーヌは結婚を承諾する。こうしてようやく夫婦となった二人は、結婚して一年で娘に恵まれ、その子はリュシーと名づけられる（第六章）。こうして穏やかで幸せに暮らしていたある日、ギョームは偶然ジャックと再会し、二人でギョームの家に行き、マドレーヌとジャックの関係がついに明らかになる（第七章）。大変なショックを受けたギョームは、ジャックと対面することに耐えられず、夫婦でそこから逃げ出すことにする。彼は、愛娘リュシーに会いに行つて心を落ち着けようと思いつく（第八章）。しかし、娘の顔を見るうちにギョームの顔が青ざめていく。リュシーがジャックに似ているというのである。驚いたマドレーヌは娘の顔を見る。

ギョームは正しかった。リュシーはどことなくジャックに似ており、しかも口

¹⁴ *Ibid.*, p. 254.

を曲げ顔にしわを寄せると驚くほどの類似を見せるのだった¹⁵。

二人の類似を必死で否定してみせるマドレーヌに対して、ギョームはリュシーを身ごもった時にジャックのことを考えていたのか、と容赦なく彼女を責め立てる。

混乱した頭に彼の悪夢の数々がよみがえった。ふたたび妻の風変わりな心の浮気のことを彼は考えた。彼女は想像力のままに夫の口づけを愛人の口づけと思いつくことで不倫の罪を犯したのにちがいない。だから愛人と娘が似ているのだ¹⁶。

リュシーとジャックの類似は、ギョームの錯乱や妄想から生まれ出たものではなく、マドレーヌにも確認できる事実である。ゾラはここで感応遺伝の法則に基づいてリュシーを描いているわけである。そして、マドレーヌのかつての恋人であるジャックの面影を宿したリュシーはギョームにとってもはや愛情の対象とはなりえない。リュシーはジャックの遺伝を受け継いでいるので、自分の娘とは思えないからである。娘とジャックからふたたび逃げ出すように、ギョームはマドレーヌと二人パリに出発することにする。パリへと向かいながらマドレーヌは、ジャックのことはもう愛していないのだからと自分に言い聞かせる（第九章）。しかしそれと同時に彼女は奇妙な感覚にも襲われるのだった。

マドレーヌがジャックの腕に抱かれて我を忘れていたとき、彼女の処女の体には消すことのできない彼の痕跡がつけられたのであった。[...] 言ってみればジャックは彼女を自分の胸に抱くことで彼女を自分の姿にかたどり、彼女に自分の筋肉と骨の一部を与え、彼女を生涯にわたり自分のものにしたのだ¹⁷。

このようにマドレーヌが意識するとしないとに拘らず、最初の恋人が残した痕跡は彼女の肉体から消えることはない。彼女の心が忘れていても体がジャックと変わらず結びついているのである。ここで語り手によってされる説明も感応遺伝に則ったものであり、それは「生理学的宿命」 *fatalités physiologiques*¹⁸ という語に言い換えられ、作品内で繰り返し用いられる。マドレーヌが自分の意志とは裏腹にジャックに結びつけられているのも、リュ

¹⁵ *Ibid.*, p. 301.

¹⁶ *Ibid.*, p. 302.

¹⁷ *Ibid.*, p. 307.

¹⁸ *Ibid.*, p. 307, p. 355.

シーがジャックに似ているのも感応遺伝説を実証する例となって我々に示される。こうしてジャックの痕跡を残したマドレーヌの肉体と、ジャックにどこことなく似たリュシーの存在はギョームにとって耐え難いものとなり、二人の関係は破綻へと向かっていく。

このように物語を構成する三人の登場人物はそのまま最初に述べた感応遺伝の実例として描かれているように見える。しかし、物語をよく読んでみると、ゾラが描く三人の関係は、感応遺伝というおそらく現代の多くの読者には荒唐無稽と映るであろう「医学理論」だけでは説明のできない何かを含んでいることに気づく。

5. 感応遺伝がもたらす解釈の幅

科学的見地から見れば怪しげなものである感応遺伝はしかし、当時ゾラ以外の作家をも魅了し、彼らにインスピレーションをもたらした¹⁹。ゾラ以外の作家が感応遺伝説から読み取る象徴的意味を検討することは、本論を進めるにあたって決して無益ではないだろう。なぜなら、それによってゾラの感応遺伝の解釈に何らかの位置づけを与えることが可能になるからである。

先に述べたように、ゾラが感応遺伝を知るきっかけになったであろう著作『愛』の中でミシュレは感応遺伝を取り上げている。ミシュレはこの本の中で当時まだあまり知られていなかったリュカ博士と彼の著作を序文で取り上げ²⁰、称賛を送るのだが²¹、我々は感応遺伝に関して他にも次のような文章を見出せる。

二重の奇跡である子どもの誕生と母の変化。受胎した妻は男になる。男の力に満たされ、その力が一度彼女の中に食い込むと、彼女は少しずつそれに屈するようになる。男が勝ち、彼女に染み込むようになる。彼女は次第に彼になるのである²²。

¹⁹ たとえば『風俗小説（1850-1914）テーマ別事典』の『遺伝』の項目に紹介されているカチュール・マンデスの *Le cruel berceau* (1889)、ジュール・クラルティの *Une femme de proie, scène de la vie parisienne* (1881) などが感応遺伝を作品のテーマとして取り上げているという。(cf. *Dictionnaire thématique du roman de mœurs 1850-1914*, éd. Philippe Hamon et Alexandrine Viboud, Presses Sorbonne Nouvelle, 2003, entrée « hérédité », p.265)

²⁰ Jules Michelet, *L'Amour*, L. Hachette, 1858, p. XVII.

²¹ *Ibid.*, p. 399. ハリーナ・スワラは、『愛』に書かれたミシュレのこの称賛を目にしたことがゾラがリュカ博士の本を読むきっかけになったのではないかと推測している。(« Zola, disciple de Michelet » in *Les Cahiers de Varsovie*, n° 2, 1973, p. 23)

²² Michelet, *op.cit.*, p. 159.

彼女が何をしようと彼女はあなたのものなのだ。[...] 一度妊娠し、浸透した妻は、いたるところに自分の中に夫を抱えていくことになる。[...] 彼女はこれほどまでにあなたのものなので、もし愛人が彼女を妊娠させても、彼女が生むのはあなたの顔立ちをとどめたあなたの子どもであることが非常に多いのだ²³。

ハリーナ・スワラが指摘しているように²⁴、ゾラが女性と彼女が最初に肉関係性を結んだ男性との間に感応遺伝が起こりうる と解釈しているのに対し、これらの文章はミシュレが感応遺伝を、妊娠が女性に与える長期的な影響ととらえていることを示している。しかも、この学説に「生理学的であるのと同じくらい倫理的な²⁵」解釈を与えるミシュレにとって、感応遺伝は必ずしも悲劇的な結果を生み出すものではない。なぜなら彼は 1856 年 3 月 2 日の日記に、『愛』に関して次のような文を残しているからだ。

作品の独創性は、次の点にある。この作品が、妻が永久に浸透され、つまり男に同化したなら、この男の幸福は彼女に、その肉体と精神に次第に浸透し、彼女に浸透されることだと明らかにしている点である。この漸進的な耕作において、この喜びが彼女を変化させている、そして彼女が彼のものになり、彼になつたと感じるにつれ、彼は彼女を享樂するのである²⁶。

ミシュレが理想とする状態とはつまり女性（妻）が、一人の男性（つまり夫）の色に永遠に染められることによって彼なしでは生きられないほどまでに彼を必要とすることである²⁷。夫の精神と肉体が妻に「染み込む」ことは、夫婦の一体化を可能とする。そしてその染み込み方が生涯消えないほどに深いものであることは、ミシュレが、『愛』の序文の中でロワール河にたとえるような穏やかで理性的な愛情が、そしてその愛によって結ばれた夫婦の絆が生涯続いていくための重要な条件となりうる といえるだろう。

このように、ミシュレが感応遺伝説において注目するのは、妊娠が女性にもたらす長期的な影響であり、二人の絆を強固なものにする永遠の「感化」という側面である。『愛』の序文にある「受胎は妻を恒久的に変化させる²⁸」という文章と、日記（1856 年 8 月 8 日）で愛の作用として掲げる「結婚を恒

²³ Michelet, *op. cit.*, pp. 277-278.

²⁴ Halina Suwala, *op. cit.*

²⁵ Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, Klincksieck, 1991, p. 332.

²⁶ Jules Michelet, *Journal*, texte intégral, établi par Paul Vialancix, Gallimard, t. II (1849-1860), p. 298.

²⁷ cf. *Ibid.*, p. 299.

²⁸ *Ibid.*, p. XVII.

久的で、精神的かつ深遠なものとする²⁹」という目標は呼応しているように思われる。つまり生涯消えない最初の男性の痕跡は、夫婦の一体化を可能にするという点から、ミシュレにおいてはむしろ肯定的な意味さえ持ちうるのである。

6. よみがえる過去

それでは、ゾラが感応遺伝とそれがもたらしうる解釈から引き出した象徴的な意味はどのようなものであるかを検討したい。『マドレーヌ・フェラ』において感応遺伝が登場するとき、それは当然のことながらほとんど常に過去というアスペクトと結びついている。ジャックが残した痕跡は、ジャックと過ごした時間とその思い出とともにマドレーヌにつきまとう。過去の思い出は、マドレーヌを占有することによって彼女とギヨームの恋愛関係、後には結婚生活に割って入ってくるだけでなく、罪悪感となってマドレーヌを苦しめる。ギヨームの家に昔から仕え、母に捨てられたギヨームを母親代わりとなって育て上げた女中のジュヌヴィエーヴに見つめられたマドレーヌは、彼女の視線にいたたまれない気持ちになる。

ときおり、マドレーヌは老女が自分をにらんでいるように思った。そんな時彼女は頭を下げ、顔を赤らめさえて、まるで許される見込みのない罪人のように身を震わせるのだった³⁰。

またジャックと過ごした時間は、ジャックと一緒に泊まった部屋にギヨームと泊まることになったり、あるいはジャックと同棲していた時期に付き合いのあった友達に再会するといった形をとって彼女の前に繰り返しよみがえり、彼女とギヨームを苦しめる。第九章で、ジャックから逃げ出した二人はパリへ行く途中にあるマントという町で古い宿屋 *Grand Cerf* に泊まることにするのだが、この宿屋は実はマドレーヌとジャックが以前よく利用していた宿屋であり、壁には *J'aime Jacques* という彼女がかつて書いた落書きまで残っている。その晩ギヨームが部屋を空けてマドレーヌが一人にいるとき、物乞いと成り果てたかつての女友達ルイズが訪ねてくる。そしてついには同じ宿に偶然泊まっていたジャックまでがマドレーヌに会いに来ることで、マドレーヌは過去に捕らわれ、引き戻され、もはや夫の姿は目に入らなくなってしまう。

²⁹ Michelet, *Journal*, *op. cit.*, p. 308.

³⁰ *ŒC*, t. 3, pp. 268-269.

彼女はジャックとこの場所で過ごした時を再び生きていた。しかも自分でそう言っていた通り、まるで一人きりでいるかのように、思わず声に出しながら回想していた³¹。

何度も過去がよみがえり、絶えずつきまとわれるうちに、過去は彼女を侵食し、彼女をいつの間にか過去の姿、つまりジャックと一緒にスフロ通りの彼の部屋に住んでいた頃の姿に戻してしまうにいたる。

マドレーヌは、その内面が変化していくうちに、娼婦のような物腰も取り戻していた。[...] 今や、スフロ通りに住んでいた頃のように、午前中ずっと髪は乱れたままだった。赤毛をうなじに垂らし、部屋着がはだけて、官能ではりつめてぼってりとした白い胸元を見せるのだった³²。

こうしてギョームと暮らし始めた頃とは別人と化してしまったマドレーヌの変身によって、女性を崇拜したいと願うギョームにとって彼女は汚らわしい存在へとおとしめられる。感応遺伝というモチーフを介して、過去は様々な形をとってマドレーヌやギョーム、そして二人の関係に侵入し、二人を押しつぶす。しかし、過去がよみがえり、男女の関係を破綻させるというこの展開は、『テレーズ・ラカン』において、テレーズと愛人のローランが、二人で謀殺したテレーズの夫カミーユの亡霊につきまとわれ、それが二人の関係を壊すにいたったことを思い起こさせずにはおかない。マドレーヌとギョームの関係を不可能にするものが過去とその亡霊というテーマに集約されるとき、感応遺伝はもはやそのテーマを導入するための単なるきっかけにしか過ぎなくなるのである。

7. 過去という障害と未知という恐怖

このように様々な形をとってギョームとマドレーヌに襲いかかるジャックとマドレーヌの過去は、彼らの夫婦関係を決定的に損ねる原因になっている。しかしそもそもマドレーヌとの恋愛の初期段階、二人の関係が進展する過程においても過去はギョームにとって大きな障害となっている。しかもそれは感応遺伝に関する言説というよりはむしろギョームの女性観に関係しているように思える。これまで述べてきたように、ギョームの女性観の中核をなしているのは、極端なほどの理想主義的である。

³¹ *Ibid.*, p. 338.

³² *Ibid.*, p. 356.

昔ジャックに話していたように、彼はただ一人の女、最初に出会う女を愛するつもりだった。彼女を自分の全存在をかけて愛し、変化への憎悪と未知への恐怖からこの愛に従うつもりだった³³。

文中の「未知への恐怖」という言葉に注目したい。ギョームとマドレーヌが初めて夜をともにすることになる第一章のフォントネーへの遠出の場面でその恐怖はすでに垣間見えている。この土地のことはよく知らない、と頼りなげなギョームに対して、マドレーヌは駅を降りて早々に道を指示するなど土地勘があることをうかがわせる。ギョームがそこにいることを忘れたかのように周りの風景に見とれ、何かを思い出すかのように空を見上げるマドレーヌにギョームは戸惑いを隠せない。

ギョームは、立ったまま、少し離れたところで彼女を観察していて不安にとらわれた。彼は、彼女と自分の間に絶えず溝が広がっていくのを感じていた。一体何をあんな風に思っているんだろう。彼女にとって自分がすべてではないことが苦しかった。ひそかに恐怖におののきながら、彼女は自分抜きで二十年生きてきたのだと彼は心に思った。この二十年が恐ろしい闇から彼の前に現れようとしていた³⁴。

自分の知らないマドレーヌの過去と彼女の過去の男という想像はギョームを苦しめる。ゾラの長編小説処女作である『クロードの告白』(1865)にもすでに見られる³⁵男女間に広がるこうした断絶は、貴族であるという誇りにしがみついたギョームをますます自分の殻に閉じこもらせることになる。しかし、彼女の過去がこれほど彼をいらだたせ、おびえさせるのはいったいなぜなのだろうか。次の文は、この疑問に対する何らかの答えを示しているようである。

彼は消え去ってしまった歳月が気がかりで、彼女の様子をうかがって仕草や視線の中に告白を読み取ろうとしていた。そして、彼女の中に自分とは関係ない考えを探り出したように思うと、彼女を満足させられないことが残念だった。彼女はもう彼に属しているのだから、身も心も彼のものにならなければならない。自分は彼女をこんなに愛しているのだから、彼女は自分の愛だけで満足で

³³ *Ibid.*, p. 253.

³⁴ *Ibid.*, p. 190.

³⁵ この小説の主人公であるクロードは、恋人のロランスとお互いへの愛と尊敬に満ちた生活を送ろうと試みるが、その試みは失敗に終わり、彼女に対して次のような気持ちを抱くにいたる。「彼女は僕から逃げ去ろうとしていた。僕は彼女と自分の間に越えることのできない障壁を察知していた。」(*ŒC*, t. 1, p. 480)

きると心に思っていた³⁶。

つまり、彼の愛が彼女にとってすべてでなければならぬし、マドレーヌはギョームにすべてを捧げ、彼に所有されなければならない。彼女の過去はマドレーヌを完全に所有することを妨げる可能性があるためにギョームを怯えさせるのである。

8. 完全なる所有

先ほどの引用で見たように、ギョームにとってはマドレーヌを完全に所有し、彼女にとって自分がすべてであることが望ましい。ギョームのこの願望は、真っ白いキャンバスである妻を夫の色に染め、夫が妻の世界を構成する全要素となるというミシュレが掲げる理想の夫婦像に近いように思われる。しかしマドレーヌがすでに最初の男であるジャックにすでに所有されているためにギョームの理想は叶わない。最初の男と、彼によって永久に所有された女と、彼女の二番目の夫という構図は、感応遺伝の解釈という点から見ればミシュレのそれとあまり変わらないといえる。ただミシュレの場合は、女の最初の男による永久の所有が永遠の夫婦の絆と結びつけられることで肯定的なものと捉えられ、ゾラの場合それがギョームの立場から否定的かつ宿命的なものと捉えられるだけだからである。それでは、ゾラの描く感応遺伝は、ミシュレの解釈を否定的に捉え直しただけのものなのだろうか。

ところで、この小説において、ギョームがマドレーヌを完全に「所有」できないのは、感応遺伝に則った永遠に消えないジャックの痕跡が阻むためだけとはいえない。たとえば、小説に登場するギョームの父の友人、ド・リュエー氏の妻エレヌに目を向けてみたい。ド・リュエー夫人エレヌは、耳がほとんど聞こえない夫が何も事情を理解していないと思って³⁷、次々と愛人を取り替えて不倫を楽しんでいる。しかも愛人にするのはせいぜい二十歳までの少年ばかりで、いつも五・六人は家のどこかに隠している。年上の人妻と不倫したいという少年は後を絶たないので、彼女は二週間ごとに男を替えているのである。そんな放埒な生活を送っていたエレヌであるが、野心家のティビュルスという少年を愛人とした時から彼女の生活は一変する。ティビ

³⁶ *Ibid.*, p. 237.

³⁷ しかし、本当は夫のド・リュエー氏は妻の不倫をちゃんと分かっているのだが、何も気づかないふりをして妻を観察することに残酷な楽しみを見出している。彼は自分だけに分かる二重の意味を持つ言葉で妻に話しかけることを無上の喜びとしているのである (*Ibid.*, p. 264 などを参照)。

ユルスは、エレヌを足がかりとしてパリで成功したいという下心があつて彼女と関係を結んでいるのだが、思うように事が運ばないために³⁸、徐々にエレヌに対して粗暴な振る舞いをするようになる。ついにはエレヌは身の回りにすら構わなくなり、実際の年よりずっと老けて、いつもびくびくするようになる。変わり果てた姿の彼女に同情したマドレーヌがティビュルスと別れたらと忠告すると、エレヌは次のように答える。

もし別れたいなんて言おうものなら、彼に殺されかねないわ。いいえ、いいんです。わたしは彼のものですから、とことんまで辛抱するつもりです³⁹。

エレヌにとってティビュルスはもちろん「最初の男」ではない。しかし、エレヌはティビュルスの言いなりであり、彼に完全に支配されている。一方がもう一方を支配し、所有するという関係はつまり、必ずしも感応遺伝とつながっているわけではないのである。

また、感応遺伝はもっぱら女性への最初の男性の影響を指摘するものであるという点を思い起こしてみたい。あらずじから見れば感応遺伝がそのまま取り入れられているように見えるこの小説であるが、実際のところ、作品の中で支配し、所有するのは必ずしも「最初の男」ではないし、支配され、所有されるのは必ずしも「女」や「妻」とは限らない。マドレーヌとギョームの関係にもそれは見て取ることができる。弱々しく、女性的な感受性を持つギョームと、官能的ではあるが男性のようなたくましさを持ち合わせたマドレーヌというカップルの場合、支配と所有の主導権を握るのはマドレーヌのほうなのである。

どんな夫婦にも起こるように、強い人間が弱い人間を宿命的に所有してしまったのである。それ以来ギョームは自分を支配する女のものになったのだった。それは奇妙で深い所有の仕方だった。彼はそこから絶え間ない影響を受け、彼女の悲しみや喜びを味わい、彼女の性格の変化を一つ一つたどった。[...] それは肉体と心の完全な浸透だった⁴⁰。

ミシュレの場合、夫婦の互いへの浸透は、夫が主導権を握って行われるため

³⁸ エレヌがティビュルスのためにいくら奔走しても効を奏さないのは、夫のド・リュエ氏が裏で糸を引いて、彼女の計画が毎回失敗するように手を回しているからなのである (*Ibid.*, p. 368)。

³⁹ *Ibid.*, p. 366.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 260.

に夫婦の絆を築くための大切な条件となっているが、ゾラの場合、浸透はもっぱら弱者への強者の支配と所有を意味している。マドレーヌとギョームの場合、夫であるギョームは主導権を握ることができず、逆にマドレーヌがギョームを支配する。つまりこの作品では、カップルの関係において相手を所有するのは、「最初の男」ではなく、場合によっては「男」でもない。重要なのはもはや性別や関係を持った順番ではなく、二人の関係においてどちらがより強いのか、「どちらがどちらを食うか⁴¹」なのである。本作品に見られるこうした弱肉強食的な力関係は、ゾラが『マドレーヌ・フェラ』を上梓した後ほどなくして刊行され始めるルゴン＝マッカーール叢書の世界⁴²を垣間見せているようにも思われる。

結び

エミール・ゾラの作品を読もうとするとき科学理論との関わりを考慮に入れることは、ゾラ作品の研究においてはそれほど盛んではなかったように思われる。それはこの半世紀ほどのゾラ研究が、おおまかに言うとするなら、ブリュヌチエール以来のゾラ批評⁴³への反論として発展を遂げてきたことによるのかもしれない。つまり『実験小説論』において医学理論を小説創作へとあてはめようとしたゾラの理論の脆弱さを批判することでゾラの小説作品の評価をも不当におとしめようとする一種の偏狭さから解放された結果が、文学者としてのゾラの再評価へとつながったのだといえるだろう。確かにたとえば『実験小説論』においてクロード・ベルナルの『実験医学研究序説』から「実験的方式」という用語を借りているからといって、ゾラの主張その

⁴¹ *Ibid.*, p. 261.

⁴² たとえば『ボヌール・デ・ダム百貨店』(1883)において、デパートという近代商業の象徴が持ち込んだ新たな販売方式によってドゥニーズの叔父ボードゥが営むラシャ商店は破産に追い込まれる。叢書の中には、近代化の波のあおりを受けて、昔ながらの商店や労働者たちが経済的、精神的に大きな打撃を受ける様子が克明に描かれている。

⁴³ ブリュヌチエールは『居酒屋』のクーポーを例にとり、「実験小説」というゾラのも思想を次のように痛烈に批判し、ゾラの言う「科学性」の非論理性を指摘した。「クーポーに実験を行うということは、一人のクーポーを手に入れ、監禁し、[...] 典型的なアルコール中毒の症例を示したらすぐに解剖台で切開することである。そうでなければ実験はなされないし、なされ得ないのであり、観察しか存在しないのである。」

(Ferdinand Brunetière, *Le Roman naturaliste*, 1882 cité par H. Mitterand dans *Zola journaliste. De l'affaire Manet à l'affaire Dreyfus*, A. Collin, coll. « Kiosque », 1962, p. 216)

ものまでベルナールからの借り物であると断ずることはできない。それどころか、『実験小説論』以外のゾラの記事や書簡とともにこの悪名高い論文を読んだとき、ベルナールの作品からの引用は、むしろゾラを思想を導入し、補強するためのものとすら見えてくる。

しかしながら、ゾラが参照し、作品に取り入れている科学理論とゾラ作品とを完全に切り離して考えることは、ゾラ作品の読み方を狭めることにもなるだろう。『マドレーヌ・フェラ』で取り上げられている感応遺伝という学説は、(特に現代の) 医学的見地から見れば、非論理的で馬鹿げたものとすると思われるかもしれない。しかし、その学説が見当違いなものであったり、ゾラにそれを見抜く医学的な勘がなかったとしても、ゾラにその責任を負わせることはできない。ゾラは当時手に入る限りの情報や正しいとされていた学説を採用し、自分の目と頭で理解し、それを作品にただけなのだ⁴⁴。ゾラが採用した医学理論の非科学性ではなく、その学説がゾラの筆によってどのようにして掘り下げられ、作品化されているかを本論ではたどってみた。ゾラによって多面的かつ重層的になった過去の描写は、「一度ろばを産むと、次に馬を産んだ場合その仔はろばに少し似ている」という例とは著しく異なるレベルに属しているように思われる。ミシュレが倫理的な観点から感応遺伝という学説を解釈したとすれば、ゾラは男女の間に横たわる未知の過去が作り出す溝や、弱肉強食という原則によって男女が互いに所有し、あるいは所有されるさまを描いてみせ、ゾラ特有の解釈を提示している。ゾラはこのようにして感応遺伝という一見すると突飛な学説を文学の一テーマに昇華し、感応遺伝というアイディアに潜む文学性を浮かび上がらせているようにも思えるのである。

⁴⁴ cf. Yves Malinas, « Zola, précurseur de la pensée scientifique du XX^e siècle » in *Les Cahiers naturalistes*, n^o. 40, 1970, p. 108. マリナは、この雑誌論文において群集描写などに比べて不評なゾラの医学資料と医学知識について『パスカル博士』を中心に分析しているが、当時の医学知識と引き合わせてみると、ゾラの解釈はその時点では正しいものとされていた学説を採用したものであると論証している。